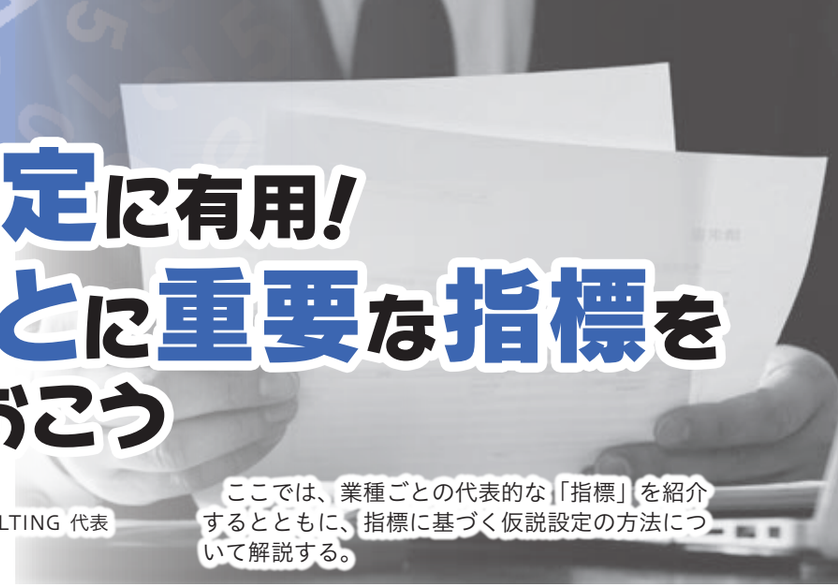


仮説設定に有用！ 業種ごとに重要な指標を押さえておこう

田中周祐　SACCEED CONSULTING 代表

ここでは、業種ごとの代表的な「指標」を紹介するとともに、指標に基づく仮説設定の方法について解説する。

取引先の「いま」を見るために、試算表や決算書を分析することは必要不可欠である。その中で活用しやすいものとして、「指標」がある。財務分析における指標とは、決算書の貸借対照表や損益計算書などの数値を基に、企業の経営状態や業績を把握するために数値化したものである。

指標には様々な種類があり、すべてを覚えることは容易ではない。そこで、業種独自の指標やその業種で見ておいた方が良いものなど、優先して確認したい指標に絞って着目することも一つの方法である。

本稿では、飲食業、製造業、小売業、建設業、運送業、卸売業について、決算書から導き出せる指標の中から各業種の特徴を踏まえ、財務分析の入口として確認しておきたい基礎的な指標を中心に取り上げる。なお、指標の表記については、原則として金融庁の『業種別支援の着眼点』に準拠している。

1 飲食業 FL比率

飲食業で見ておきたい指標として、「FL比率」がある。FL比率とは、FLコスト（FOOD＝材料費、LABOR＝人件費）の合計を売上高で割ったもので、売上高に対して材料費と人件費にどれだけ費用をかけているかを見る指標である。

材料費率と人件費率を分けて確認

FL比率が高い場合、売上高に対する主要な費用負担が大きいことを意味する。『業種別支援の着眼点』では、FLコスト（＝FL比率）60％を一つの目安としている。まずFL比率を確認し、材料費率と人件費率に分けて見ることで、より具体的な仮説を立てることができる。

2 製造業 棚卸資産回転率

製造業については、飲食業のFL比率や後述する建設業の立替工事高比率のように、業種に特化した独自指標を一つに絞って挙げることは難しい。その一方で、設備投資、在庫、原価管理など、複数の視点から事業の実態を見る必要がある。

そこで、今回は「棚卸資産回転率」に注目したい。棚卸資産回転率は、棚卸資産がどれだけ効率よく売上等につながっているかを見る指標である。

製造業の棚卸資産には、製品だけでなく原材料や仕掛品も含まれる。つまり、すでに資金を投入しているものの、まだ売上や現金化につながっていない資産も含まれるため、この指標を挙げた。

一般に、棚卸資産回転率が高いほど、在庫として資金が滞留していないと考えられる。ただし、高ければよいとは限らず、在庫不足による機会損失の可能性もある。

反対に低い場合には、原材料、仕掛品、製品のどこで在庫が滞留しているかを確認するなど、仮説を立ててヒアリングすることが重要である。

3 小売業 総資本回転率

小売業で優先して見たい指標の一つが「総資本回転率」である。総資本回転率は、会社が保有する総資本を使って、どれだけ売上高を生み出しているかを見る指標だ。

小売業は、商品を仕入れ、店舗や売場などの経営資源を活用して販売するという事業構造を持つ。そのため、「どれだけ利益率が高いか」だけではなく、「持っている事業資産をどれだけ売上につなげているか」という視点が重要になる。

ただし、小売業は取扱商品や業態、店舗規模によって各数値が大きく異なる。自社物件か賃借物件かによっても総資本回転率は変わるため、単純に業界平均と比較するのではなく、自社の過去数年間の推移も見たい。



4 建設業 立替工事高比率

建設業では「立替工事高比率」に注目したい。これは、工事を進める過程で工事代金を受け取る前に、企業がどの程度資金を立て替えているかを見る指標であり、資金繰りの円滑性を確認するために有効である。

過去からの推移を忘れずに確認

『業種別支援の着眼点』では、中小建設業の目安として

図表1　業種別に見ておきたい財務指標

業種	指標	計算式	主な着眼点
飲食業	FL比率	（材料費＋人件費）÷売上高×100	材料費＋人件費の負担
製造業	棚卸資産回転率	売上高÷棚卸資産※	在庫への資金滞留
小売業	総資本回転率	売上高÷総資本※	保有事業資産からの売上創出
建設業	立替工事高比率	（受取手形＋完成工事未収入金＋未成工事支出金−未成工事受入金）÷（完成工事高＋未成工事支出金）×100	工事に伴う資金負担
運送業	固定長期適合率	固定資産÷（自己資本＋固定負債）×100	車両等の設備資金の調達
卸売業	売上高営業利益率	営業利益÷売上高×100	本業の収益性
	棚卸資産回転日数	棚卸資産÷（売上高÷365日）	在庫の滞留

※複数の計算方法があるため、ここでは簡便な方法を示す
（出所）筆者作成